ISSN 0910-2396

理子鳥だり

北海道野鳥だより第170号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 24年12月21日

ツムナガホオジロ



2012. 1. 16むかわ町撮影者 小 堀 煌 治 (札幌市南区)



もくじ

いしかり調整池―コモンシギ― 札幌市手稲区	坂井 伍一	 2
アカツクシガモ観察記録		
北海道大学野鳥研究会	島崎 敦	 3
十勝沖の海鳥と海獣―地域の団体が連携して取り)組む調査―	
中川郡池田町		 4
アカハラダカ観察記		
自然環境調査員 苫小牧市	芝田 翼	 8
一新聞情報から一	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	
ヤイロチョウとベニバト(天売島・利尻島)	広 報 部	 9
鳥見の初めは、宮島沼 札幌市東区	AR 1 BAS I R	 10
建設コンサルタントにおける環境調査と野鳥愛護		10
(株)ドーコン 河川環境部	~	 11
ミゾゴイを見ました(室蘭測量山) 室蘭市		 12
探鳥会ほうこく	林田 子1	 13
探鳥会あんない		 16
R 与 云 め ん な い ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		 16

いしかり調整池―コモンシギ―

札幌市手稲区 坂 井 伍 -

今年のいしかり調整池(石狩市北生振)は、8月23日(木)に水抜きが終了し、早速イソシギが入り、カワセミの幼鳥が小魚を採る光景が見られました。その後、徐々にシギ・チドリなどが飛来し、多くのバードウォッチャーが訪れ、一層の賑わいを見せていました。

いしかり調整池での大きな収穫は、コモンシギを観察できたことです。9月4日(月)の13時過ぎに、管理棟下で昼食を摂った後、正面から池を見ていたところ、中央右側にできている大きな中州に20羽ほどのトウネン、メダイチドリが降り、その中に見慣れないシギが1羽いるのを見つけました。

望遠鏡で観察すると、大きさはメダイチドリと同じくらい、黄褐色味が強く、眼が大きく見え、胸側に細かな黒い斑紋が見えました。コモンシギではないかと思い、証拠写真を撮ろうと、池の周りを反時計回りに歩いていき、右側



コモンシギ

中央からデジスコで撮影しました。画像を確認するとやは り前述の特徴が明瞭に認められました。この個体は、1時 間ほどでハヤブサに追われ、飛び去りましたが翌朝にも観 察されています(当会の島田芳郎氏確認)。

コモンシギは北アメリカ北部で繁殖し、冬期は南アメリカに渡り越冬するとされ、日本には渡りのコースから外れて飛来する迷鳥として、北海道でも鵡川で3度、浦幌、根室、紋別コムケ湖での記録(北海道鳥類目録改訂3版:藤巻裕蔵氏)がありますが、石狩管内では初めての記録のようです。このように滅多にお目にかかれない野鳥を観察できたこともあり、来年もいしかり調整池に沢山のシギ・チドリが飛来することを期待しています。

なお、この件に関し、一緒に観察し、色々ご助言をいただいた当会の中正憲佶・弘子ご夫妻、また、最終的な同定に協力いただいた樋口孝城氏に感謝申し上げます。



コモンシギ(右)とメダイチドリ(左)

アカツクシガモ観察記録

北海道大学野鳥研究会 島 崎 敦

2012年8月5日、毎週末の恒例でサークルの仲間(鈴 木祐太郎、稲垣恵理、井田東吾、加藤瑞貴)と鳥見に出か けていました。この日は石狩川沿いで草原性の鳥たちを見 た後、もう南に向かって渡りはじめたシギ・チドリの仲間 を狙って、石狩湾新港西地区の埋め立て地(小樽市銭函) を目指しました。この埋立地には池状に水がたまったとこ ろがあり、春・秋ともに渡りのシギ・チドリの仲間やカモ の仲間が多く逗留し、7月には旭山動物園から逃げ出した フラミンゴも来てマスコミを賑わせた、皆さんもよくご存 じの場所だと思います。埋め立て地近くの道路に駐車し車 から降りて準備をしていると埋め立て地のほうから一人 のバードウォッチャーと思われる首から双眼鏡を下げた男 性が歩いてきました。この男性は自身の図鑑のあるページ を指さし、「この鳥が今いました」と私たちに教えてくれ ました。男性が指さしていたのはなんとアカツクシガモで した。

午前9時45分。向かって奥にある池に見慣れぬ大きめのカモが2羽いました。双眼鏡でのぞいてみたところ、体の橙赤色がまず目立ち、それに比べると頭から首にかけては白っぽく見え、風切が黒いことからやはりアカツクシガモであると判断しました。2羽のうち1羽には雄の特徴である細くて黒い首輪状の模様があり、もう一方の個体は雄と思われる個体と比べて嘴から目の周りにかけて白っぽく見え、頭部がより白いという雌の特徴と一致していました。また、飛翔時には上面は2羽とも灰色味がかっていなかったので成鳥だったのだと思います。私たちが池の対岸の堤の上に立っただけで驚いたように飛び立ったので、周りにいたシギたちと比べて警戒心は強いという印象を受けまし

た。遠くの空き地に舞い降りましたが、しゃがんで観察しているとしばらく後に再び飛び立ち池に戻ってきました。あまり泳ぐことはせず、水際をペタペタと歩いて、水中に顔を入れては棒状の水草のようなものを食べていました。しばらく観察を続けていましたが、正午ごろ、アカツクシガモ達が何かに驚いたように突然飛び立ったので双眼鏡を向けました。トビにそのつもりはなかったのだと思いますが、トビに追われるようにして飛んでいました。2羽はトビが旋回した後も手稲の山々を背に西に向かってほぼ直線的に飛び、次第に見えなくなって行きました。

アカツクシガモは少数が冬鳥として日本各地に飛来することが知られていますが、夏期は主に中国からトルコにかけてのユーラシア大陸中部で繁殖しています。そのためこの時期に生息地からはるか東側の日本で観察されるというのは本来ならあまりあることではありません。籠脱けをした個体である可能性もありますが、足輪がついていなかったことから、動物園などから逃げ出したものではないと考えられます。また、日本では個人が飼育しているという話はあまり聞かないので、籠脱けの可能性は小さいのではないかと思います。そのため、理由づけすることは難しいですが、なんらかの事情で生息域からはるか東側に迷い込んでしまった個体なのではないかと思います。

私はカモが好きで、アカツクシガモはいつか見てみたいと思っていたカモの一つでした。実際に見たアカツクシガモは仕草が可愛らしく、飛翔時に見える上面のオレンジ、緑、白、黒の配色が意外にも落ち着いた印象を与える美しい鳥でした。にわか雨の降る曇天の中、鳥見に出かけた甲斐があったと思います。



地上に降りたアカツクシガモ



飛翔中のアカツクシガモ

十勝沖の海鳥と海獣 ─地域の団体が連携して取り組む調査─

中川郡池田町 千 嶋 淳

太平洋、日本海、オホーツク海と性質の異なる3つの海に囲まれた北海道近海では、四季を通じて様々な海鳥や海獣を観察できます。これまで海鳥や海獣の調査・観察というと、繁殖地とその近海が中心でした。しかし2006年にオホーツク海で発生した海鳥大量死のように、海洋汚染や漁業との軋轢といった人間活動による脅威は彼らが生涯の大半を過ごす繁殖地周辺以外の海上でも起こりうるもので、最近では洋上風力発電の問題もクローズアップされています。そうした問題に適切に対処するためにはいつ、どこに、何がどれくらいいるかという、基礎的な分布情報が必要ですが、ほとんどわかっていないのが実情です。それでも近年、北海道でも海鳥観察の機運が高まりつつあり、各地で観察や調査が行われるようになって来ました。本稿では筆者らがここ数年行っている十勝沖における小型船での海鳥・海獣調査について、概要を紹介させていただきます。

(1) 団体横断的な運営体制

本調査は2010年、漂着アザラシの会が「北海道十勝地方における海獣・海鳥・海岸漂着物に関する調査・普及活動」で日本財団より助成を受けたことにより始まりました。漂着アザラシの会は元々、2005年の広尾水族館閉園後、十勝・道東で弱って打ち上がるアザラシ類の子どもに対して適切な対応のできていないことを受け、そのサポートのため2008年に設立された団体ですが、アザラシ類の暮らす海について広く調べ、知る必要があるとの考えから、十勝の海の動物や漂着物の調査を企画したのです。

さて、予算面でのハードルをクリアして調査を実行に移す際、問題は傭船でした。フェリーやウォッチング船のある海域ならそれらを利用すれば良いのですが、残念ながら十勝にはありません。ここで協力いただいたのが1990年の設立以降、浦幌町周辺で精力的な観察や調査を続けて来られた浦幌野鳥倶楽部です。久保清司事務局長に相談して、同倶楽部が不定期に海上観察会を開いて来た遊漁船の船頭さんを紹介いただき、挨拶に伺ったところ快く傭船を引き受けて下さり、現在に至っています。

実際の調査に当たっては、観察や記録を手伝ってくれる人が必要ですし、普段見られない海鳥・海獣の世界を多くの人に体験してもらいたいと思いました。ここで大きな役割を果たしたのが日本野鳥の会十勝支部(現NPO法人日本野鳥の会十勝支部)です。約180名の会員を有し、その1/3が加入しているメーリングリストを持つ同会で調査

への参加を呼びかけ、多くの方に乗船いただきました。これまで参加した50人のうち、4割近い18人は十勝支部会員です。十勝支部は2011年10月にNPO法人となって活動の幅も広がり、2012年にはセブンイレブン記念財団よりアホウドリ類、カンムリウミスズメに特化したプロジェクトで助成を受け、調査に厚みを加えることができました。

このように本調査はその開始時より地域の複数の団体が、 それぞれの強みを生かしながら連携して運営して来たのが 特徴です。また、上記団体以外にも帯広畜産大学をはじ めとした学生や個人、博物館、マスコミ、海鳥保護関係 者等にも可能な限り乗船してもらっています。調査は月に 1、2回、浦幌町厚内漁港から沖合20km程度の範囲で、 約4~5時間行っています。13人乗りの小さな船ですの で波風を直に受け、冬の寒さは半端でありません。人に よっては船酔いで地獄の苦しみを味わいます。そんな中、 出現した全ての鳥獣について時刻や数、行動等を記録しな ければならない調査は、なかなか過酷です。それでも様々 な海鳥を間近に見ると疲れも吹き飛び、遊漁船の強みを生 かして沖で釣りをしたり、大きなマンボウを観察する等、 遊び的要素を取り入れることもあります。市民主体の調査 なので、とにかく楽しみながらの継続をモットーにしてい ます。下船後、船頭さんの番屋でいただく旬の海の幸も楽 しみの一つで、鮭のチャンチャン焼き等つつきながら沖で 見た海鳥やその生態について語らう場は、さながら海鳥・ 海獣に関わる人達のサロンのようでもあり、調査を通じて 人の交流を促進する機能も果たしています。

(2) 十勝沖の海鳥・海獣とその四季

2010年1月から2012年10月までの2年半に35回調査を行い、冬には時化で出られない月もありましたが、2年半を通すと全ての月を網羅できました。24科93種の鳥類、5科7種の海獣類を確認し、その中にはエトピリカやケイマフリ、マダラウミスズメ等の貴重種やオオトウゾクカモメ、アカアシミツユビカモメ、ツノメドリ等十勝からの初記録となる種も多く含まれていました。普通種もこれまでは「記録がある」程度だったものが大部分で、生息状況やその季節変動がようやくわかってきました。これまで出現した種と月ごとの確認状況のリストを表1、表2に示します(鳥類は海鳥のみ掲載)。それでは次に、これら海の動物たちを季節ごとに概観してみましょう。

表1 鳥類 (海鳥のみ)

1 2 2 3	種名 / 月コクガンスズガモ		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3								-		-	_	_	-	
3	スズガモ			1		•	•							
3			•	•	•	•	•	•				•	•	•
4	シノリガモ		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
	ビロードキ	ンクロ	•	•	•	•	•					•		•
-	クロガモ		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
	コオリガモ		•	•	•		_			_				•
	ホオジロガ	ŧ	•	•	•									•
	カワアイサ								****					•
	ウミアイサ		•	•	•	•						•	•	•
-	アカエリカ・	イツブリ	•	•	•	•	•							•
_	ミミカイツ			•	•	•	•							Ĕ
	ハジロカイ						Ť					•		
-	アビ		•	•	•	•	•					•		•
-	オオハム						•	-			•	Ĭ		_
\vdash	シロエリオ:			•		•	•	•	-	•	•	•	•	•
	ハシジロア			•	•	•	•			Ť				
-	コアホウド				•	•	•	•	•	•	•	•	•	_
-	クロアシア					_	•	•	•	•	•	•	•	
	アホウドリ						-		Ť	•		_	•	
_	フルマカモ	×			•		•	•	•	•		•	•	
	オオミズナ						_			•	•	•	_	
		・・~ ガミズナギドリ							_	j	_	•		
	ハイイロミ		-			-	•	•	•	•	•	•	•	
	ハシボソミ					•	•	•	•	-	-	•	-	
-	アカアシミン					-	_	_	•	•	•	•		
	コシジロウ				-			•	_	Ť	_	•		_
-	ハイイロウ						-		•					
	ヒメウ		•	•	•	•	•	•	-	•	•	•		
_	カワウ		•		•	•	•	•		•	•	•	•	Ť
	ウミウ				•	•	-	•	•	•	•	•		-
	アカエリヒリ	ノアシシギ			_		•		•	-	-	•		
	ハイイロヒリ		-				-		•	•	•	•		
-	ミツユビカー						•	•		•	_	•	•	
	544 St 544 St	ソユビカモメ					_	_				•	_	
	ユリカモメ	7					•			_		-	•	
-	ウミネコ						-	•	•	•	•		•	
	カモメ		•		÷	-		_	_	_		-		•
	ワシカモメ		_	•		•	•					_		-
	シロカモメ				•	•	•	_				•	•	-
	セグロカモン	×		-	-	-	•	_	•		•	•	_	_
_	オオセグロ		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
-	コシジロア			-	•	•	•	•	•	•	•	_	_	_
_	コンシログ: アジサシ			\vdash				•	•	•	•			
-	オオトウゾ?	ウカチャ			-				•	•	•	_		
	^ ^ トワン: 								•		-	•		
	トリンクガ- クロトウゾ:							•	_	•	•	•		
-	ハシブトウミ		•					•	•	•	•	•		_
-		. // / /	•	•	•	•	•	•			•		•	•
	ウミガラス ウミバト		•	-	•			•		_				•
-	ワミハト		_	-			_						_	_
		7 7 4	•	•	•	•	•						•	•
	マダラウミス	^^/		_		-	•		•	_			_	_
	ウミスズメ	772	•	•	•	•	•	•	•	_		_	•	•
	カンムリウミ	×	_				_		•	•		•		
\vdash	ウミオウム	,	•	•	•								•	_
	コウミスズメ		•	•	•		_							•
-	エトロフウミ	ミスズメ	•		•		•		_					•
	ウトウ				•	•	•	•	•	•	•	•	•	
58	ツノメドリ								•					
59	エトピリカ						•		•			•		

表 2 海獣類

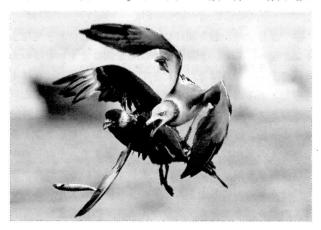
No.	種名 / 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	ミンククジラ						•						
2	ザトウクジラ						•						
3	カマイルカ							•	•	•			
4	ネズミイルカ	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
5	イシイルカ								•	•	•		
6	キタオットセイ					•		•			•		•
7	ゼニガタアザラシ				•								

春 3月中旬、厳冬期には姿を消していたウトウやウミネコが戻って来て、十勝沖の春は幕を開けます。とはいえ景観や主だった鳥はまだまだ冬で、本格的な春の訪れは4月中旬、南半球での繁殖を終え、赤道を越えて飛来するハシボソミズナギドリの到来を待つことになります。5月は渡りの季節。鮮やかな夏羽を纏ったアビ類やヒレアシシギ類等多くの鳥が続々と海上を飛んで行きます。それらの中には淡水ガモ類やキジバト、セキレイ類といった陸鳥が思いのほか多いのに驚かされます。5月後半、大半が冬鳥なはずのハシブトウミガラスやウミスズメの姿もまだ多く、これらの種の渡りが遅いのか、繁殖しない若鳥がゆっくりしているのかは不明です。海の青と空の青、それに残雪を日々頂に押し上げて行く日高山脈の青が渾然一体となって、一年で最も美しい景色を見せてくれるのもこの時期です。

夏 6月を過ぎた道東太平洋は海霧の季節です。千島列 島から流れる冷たい親潮へ、南からの暖かく湿った風が吹 き込み、海上は時に50m先さえ見えない乳白色のベール に包まれます。沖合ではフルマカモメやコアホウドリが増 え、ハシボソ中心だったミズナギドリ類は徐々にハイイロ へとシフトします。ザトウクジラやミンククジラといった 大型鯨類が観察されたのもこの時期で、短い夏に爆発的な 生産性を示す極北の海を目指して、海鳥も海獣も急いでい る様が窺えます。7月、十勝沖の海水温は一気に高くなり、 マンボウやサメの仲間といった暖かい海の魚の出現がそれ を物語ります。この頃から初夏に多かったコアホウドリが 減る一方、クロアシアホウドリが増えて来ます。前者が春 と秋に多いのに対して、後者は夏の後半から初秋、海水温 の高い時期に優占します。本州や九州等の暖かい海での繁 殖を終えたカンムリウミスズメが姿を現すのもこの頃から です。カマイルカの群れが時には船と競うように泳ぎ、舳 先付近でダイナミックな姿を披露してくれることもありま す。8月、主役はオオミズナギドリへと移行します。道内 では渡島大島で少数繁殖するだけですが、伊豆諸島からも 片道約1000kmをかけて道東沖まで飛来することが知られ ており、日によっては数千羽が川のように漁場から漁場へ 移動する姿を見かけます。

秋 霧の季節が続く7月中旬、早くも戻りのヒレアシシギ類が目に付くようになります。5月に北上して行った彼

らの、余りにも早い帰還は繁殖地の短い夏の裏返しなのでしょう。8月に入るとアジサシ類やトウゾクカモメ類が続々と南下し、迷鳥とされるコシジロアジサシも観察されました。9月にはセグロカモメやミツユビカモメも増え、日ごとに秋の深まりを感じます。10月上旬、沖ではまだオオミズナギドリの多い状況が続きますが、この頃から北寄りの冷たい風の吹く日が多くなり、アビ類や海ガモ類も増え



ウミネコを襲ってイワシを奪うトウゾクカモメ

てゆきます。イワシの巻き網船団が魚影を追って十勝沖に現れ、操業時には数千羽のカモメ類が群がり、トウゾクカモメ類が徒党を組んでそれを襲撃する、迫力ある光景が眼前で繰り広げられることもあります。ミナミオナガミズナギドリやアカアシミツユビカモメ、オオトウゾクカモメ等、いわゆる珍鳥の記録が多いのも秋の特徴です。もっとも、これらは陸上基準での珍鳥であって、調査が進めば実は沖合には定期的に飛来しているのかもしれません。

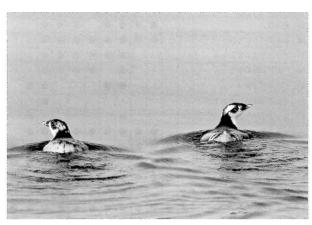
冬 調査海域での漁業がシシャモから毛ガニへ変わる直 前の11月中旬、十勝沖は本格的な冬を迎えます。強い北 西風を吹き降ろす日高山脈は日々白さを増し、海上の寒さ はダウンコートで防寒した身を嘲笑います。アビ類やカモ メ類、ウミスズメ類といった冬の海鳥が増える一方、ハイ イロミズナギドリやアホウドリ類はまだ残っていて、夏冬 の鳥が混在しています。12月にはミズナギドリの仲間は 姿を消し、カモメ類、ウミスズメ類のチドリ目が優占する 冬の北日本特有の海鳥相を示します。オホーツク海の流氷 が南下し、年によっては太平洋に流入する1月下旬から3 月、十勝沖ではウミスズメ類がその盛期を迎えます。沖合 ではコウミスズメやエトロフウミスズメ、沿岸ではケイマ フリ等が、時に大きな群れで観察され、ウミオウムやウミ バトが現れるのもこの時期です。沿岸は海ガモ類やアビ、 ミミカイツブリ等で賑わいます。ただ、残念ながらこの時 期の海上は、春から秋に比べよくわかっていません。時化 に続く時化や極端な低温による船のエンジン故障によって、 海に出る機会が著しく減るからです。冬の北の海での調査 は厳しく、しかしそれゆえ未知の発見が多く眠っている魅 力があります。

3月中旬、沖から望む十勝の大地は真っ白で、見られる 海鳥もウミスズメ類はじめ冬色が濃いですが、カモメやシ ロカモメに混じって漁船に群がるウミネコの姿に微かな春 の気配を感じます。ちょうど十勝川下流域は北上して来た ガン類で賑わい、釧路地方で越冬していたタンチョウも繁 殖地へ帰って来る時期でもあります。こうしてまた、新た なシーズンが始まるのです。

(3) 印象的な鳥四題

①カンムリウミスズメ

ウミスズメ類としては例外的に伊豆諸島や九州周辺の離島等、暖かい海で繁殖し、非繁殖期の分布や生態は謎に包まれています。近年、北海道から東北地方にかけての太平洋上で記録されており、本調査でも7~10月に度々観察されています。近隣海域での調査結果と合わせると、同時期の道東太平洋には相当数が渡来している状況がわかってきました。北日本の太平洋は非繁殖期の本種にとって重要な海域なのかもしれません。今まで記録が殆んど無かったのは、北海道にいる期間の非生殖羽(9、10月には生殖羽も見られますが)の羽色が知られていなかったこと、岸から10km以上離れた水深50m以深の海域に主に分布すること等が理由でしょう。



カンムリウミスズメ

②ウミスズメの家族群

ヒナは孵化から僅か2日で巣を離れ、親とともに海上生活を送るという変わった繁殖習性を持つ本種は、天売島や根室のハボマイモシリ島で巣卵やヒナの確認記録があるものの、現状はよくわかっていません。2012年7月、合計3組の家族群を観察・撮影しました。ヒナはいずれも2羽で、2組はまだ綿羽に覆われた幼い鳥、もう1組もようやく正羽が生え揃った段階で、6月下旬から7月の孵化と推察されました。道内のどこかで繁殖したのか、南千島等で繁殖したものが沿岸親潮に乗ってやって来たのか不明ですが、十勝沖はウミスズメの子育てにとって大事な場所の可能性があります。

③ウミオウム

千島列島やベーリング海で繁殖し、北日本で稀な冬鳥とされるものの、記録は非常に少数です。ところが2011年1月の調査では次々と、合計63羽が現れました。これだけでも驚いたのですが、翌2月にはなんと119羽が記録され、優占種の一つでした。2011~12年の冬には11月に1羽出現したものの、1、2月に全く調査できなかったため、前年度のような数は確認できず、単年度だけの現象だったかそうでないかの判断は今後の調査を待たねばなりません。ウミスズメ類の中でも際立って飛び立ち距離が大きく、角度によっては他種との識別が難しい本種の確認には、デジタルカメラによる撮影が非常に有効でした。

④ 南北の海を繋ぐアホウドリ類

2010年5月、赤い「C431」の足環を付けたコアホウドリを撮影して山階鳥類研究所に照会したところ、2001年に米国ミッドウェイ諸島で標識された鳥とわかりました。また、小笠原諸島聟島列島で標識されたクロアシアホウドリを5羽、伊豆諸島鳥島で標識されたアホウドリ1羽をこれまでに確認しています。これらの鳥の存在は、一見無関係のような南北の海が実は繋がっており、彼らにとっては繁殖地と同様、非繁殖期に餌を食べる北の海もまた大切であることを私たちに教えてくれます。

(4) 成果発信に向けて

2年半(2012年10月現在)の調査で、十勝沖にこれまであまり知られていなかった豊かな海の動物の世界のあることが明らかになって来ました。もちろん、動物たちの分布や行動には年や季節による変動もありますから、これで十分ということはありません。今後も可能な限り長期間継続し、市民が取り組む非繁殖海域での海洋動物モニタリングという、ちょっと風変わり(でも必要!!)な調査の先行事例となることを目指します。

同時にこれまで得られたデータや写真を使って、この豊かな世界を多くの人に知ってもらうための活動を今年から本格的に開始しました。5月の帯広百年記念館からスタートした「十勝沖・海の動物たち」展は、浦幌町立博物館、十勝エコロジーパーク、襟裳岬風の館(襟裳岬では「北海道沖・海の動物たち」展)と十勝周辺各地を巡回し、今後も数ヶ所で開催予定です。実物大のコアホウドリやオオミズナギドリの紙模型が舞う会場では、70~80枚の写真や文章で海鳥・海獣や調査の様子を紹介しました。襟裳岬風の館では、「海鳥たちの交差点・北海道太平洋の海」と題した講演も行いました。これらを通じて自分たちの住む地域にも多様な海の動物がいることを知り、興味を持つきっかけとなっていただけたらと願っています。また、今後は十勝以外や道外でも紹介の機会を作ってゆきたいと考えており、11月に千葉県我孫子市で開催されたジャパン・



コアホウドリ

バード・フェスティバル(JBF)へは漂着アザラシの会、 NPO法人日本野鳥の会、浦幌野鳥倶楽部の連名で出展し、 栄えある「オオバン賞」をいただきました。

2012年3月には漂着アザラシの会より「十勝の海の動物たち」を発行しました。A5判20ページの小冊子ながら、十勝で確実な記録のある海鳥58種、海獣8種を80点以上のカラー写真で紹介し、観察月や頻度の情報は十勝以外の道内でも役立つものと思います。通常の図鑑では写真が掲載されていない種を多く扱っているのも特徴です。鳥類・海獣類関係者や地元教育機関等に配布したほか、イベントやネット上で販売も行っています。

得られた成果から保全に関する提言や実践を行うために は、広く一般の方々への発信と同時に科学的な吟味が欠か せません。そのための足がかりとして、9月に東京で開催 された日本鳥学会100周年記念大会で、「北海道東部の太 平洋上におけるカンムリウミスズメの観察記録」と題し ポスター発表を行いました。同発表では本調査に加えて、 NPO法人エトピリカ基金による霧多布沖、さかまた組 (シャチをはじめとした海洋生物の調査・研究グループ) 主催の釧路沖調査のデータも用い、道東太平洋でのカンム リウミスズメの季節性や羽衣、洋上分布等について議論し ました。海上での調査は回数や範囲に制約があるため得ら れるデータも限られますが、今回のように複数の団体がス クラムを組めば、謎が多い海の動物の生活が少しずつ見え て来る確かな手応えを感じました。それと関連して現在、 海鳥や海獣の調査や保護管理は個別に行われがちですが、 どちらも海洋生態系における高次捕食者であり、同じ海の 恵みを享受している人との間に似たような問題を抱えてい ます。今後の調査や保護区の運営等に当たっては、海鳥・ 海獣の協働が必要と強く感じています。

最後になりましたが、調査に興味を持って参加してみたい方(ただし人数には上限があり、日程は海況を受け頻繁に変更します)、展示や講演を引き受けても良いという方、冊子「十勝の海の動物たち」の購入(1部500円)を希望される方は、メールにて連絡をお願いいたします。

E-mail: pvstejnegeri_yoidore@dance.ocn.ne.jp

アカハラダカ観察記

自然環境調査員 苫小牧市 芝 田 翼

2012年9月15日に、タカの渡りの観察ポイントとして 知られるマスイチ浜展望台(室蘭市増市町)で、北海道で は極めて希なアカハラダカを観察・写真撮影したので報告 します。

私は春から夏には主に蝶の写真を撮り、今年10月には 札幌市の教育文化会館ギャラリーで仲間4人とともに「蝶 に魅せられて・・・」と称する写真展も開いたのですが、鳥 も大好きで、5年ほど前から秋にはマスイチ浜に行ってタ カの渡り観察・写真撮影を楽しんでいます。

この日は早朝からマスイチ浜展望台で、同好の士である 大岡徳雄さん(室蘭市在住)と一緒に空を見上げていまし た。そこにはハヤブサの写真などで高名な野鳥写真家の熊 谷勝氏もおられました。

午前6時頃になんだかよく分からないタカが飛んでいるのを皆で見ました。ツミだろうかと思いましたが、すぐ近くを飛んでいたアマツバメとの比較で、ツミにしては大きい印象を受けました。相当の距離があったのですが、ともかくも私が一枚写真を撮りました。ディスプレイ上の写真を熊谷氏に見てもらったところ、アカハラダカじゃないだろうか?との助言をいただきました。確かに画像で翼先が黒いのが微かに見え、腹も赤く見えます。でも、あまりに遠かったので小さくしか写らず、拡大しても不鮮明だったため、断定は避けました。その後、ツミのような小型のタカが出現するたびにアカハラダカを疑い、念入りに観察していましたが、一向にアカハラダカと思われるものは現れませんでした。

あきらめかけた午前11時少し過ぎ、その時にはやはり同好の士である山上正宏さん(千歳市在住)と茨木岳山さん(石狩市在住)も加わっていましたが、小さなタカが樹林地上空を南西へ羽ばたき飛翔し、私たちの方に向かってきました。レンズを向けてファインダーに捕らえた瞬間に翼先が黒いことが確認できました。アカハラダカ! 風を受けて大きく翼を広げた瞬間を狙いシャッターを切りました。その個体は展望台上空で旋回上昇した後、西北西へ徐々に高度を下げながら滑翔し、樹林の陰になり見えなくなりました。この間、3分足らずでした。カメラのディスプレイ上で外側初列風切先端の分離が4枚であること、胸に赤みがあること、虹彩が黄色いことも改めてしっかりと確認できました。

この個体は外側初列風切に幼羽(黒くなく、横斑がある) が残っていることから、2年目の鳥とみなされました。 3年目には全部黒くなるとのことです。虹彩が黄色いのは 幼鳥および成鳥雌の特徴(成鳥雄の虹彩は暗赤色)ですが、 次列風切には無斑の羽毛と横斑のある羽毛が混在しています。これは「図鑑日本のワシタカ類」(森岡照明ほか、文 一総合出版、1995)によると2年目雄の特徴となっています。2年目の個体であることは確かと考えますが、雄か 雌かは私には判断がつきかねます。識者のご意見を仰ぎたく思っています。



アカハラダカ 2012. 9.15 室蘭市マスイチ浜

野鳥関係の方々に伺ったところ、北海道でのアカハラダカの公表された記録は1987年5月10日の根室でのもの(高田勝、根室管内鳥類リスト、根室市博物館開設準備室紀要15、1991)があるだけとのことです。ただ、その記録には写真や観察記録は添えられていないそうです。また、何年か前の秋に同じく室蘭の測量山で見られたという話をベテランの方にお聞きしました。いずれにしろ明確な写真という具体的証拠を伴った記録はこれが初めてのようです。

話は前後しますが、アカハラダカ出現から一段落した後、上空を見上げると5羽くらいのハチクマとツミ幼鳥1羽の小規模なタカ柱が見られました。この日はところどころ雲がかかっていましたが、朝からよく晴れた日で、成鳥主体のハチクマが100羽前後渡ったと思います。地元の方々によるとタカが一番渡った日だったそうです

久しぶりにドキドキした体験でした。自然相手の趣味は 続けていればこうやって思わぬご褒美があるからやめられ ません。

最後になりましたが、ご助言をいただいた熊谷勝氏に深 謝いたします。あの助言がなければアカハラダカの次の出 現を意識することもなく見逃してしまったり、シャッター チャンスを逃したりしていたかもしれません。

─新聞情報から─ ヤイロチョウとベニバト(天売島・利尻島)

広 報 部

今年2012年、北海道では希なヤイロチョウが6月13日に天売島(北海道新聞7月27日夕刊、全道版)で、また、同じく希なベニバトが7月30日には天売島(同8月14日朝刊、全道版)で、9月8日と9日には利尻島(同9月20日朝刊、留萌・宗谷地方版)でそれぞれ観察・写真撮影されたことが報道されました。今回、それぞれの撮影者の方から観察概要と写真を寄せていただきましたので紹介します。

ヤイロチョウは、広島県福山市から野鳥観察で天売島を訪れた森久繁さん(日本鳥類保護連盟会員)が、お寺の境内の木にとまっているところを偶然見つけて、ビデオカメラで撮影しました。掲載写真はビデオの一画面を切り取ったものです。モノクロでしか掲載できないのが残念なのですが、元のカラー写真では「八色鳥」そのものの色合いが鮮やかです。森久さんは「本州でも見たことがない鳥を見られるとは」と驚いたそうです。北海道の過去の記録としては、1986年5月24日に、松前中学校(渡島管内松前町)の窓ガラスに衝突して死亡という1例のみのようです(藤巻裕蔵、北海道鳥類目録改訂3版、2010)。



ヤイロチョウ 2012. 6.13 天売島

天売島のベニバトは、神奈川県川崎市から旅行に来られた木下浩さん(教員)が島を車でゆっくりと風景を観察しながらまわっていたところ、島中央部の森の入口付近の道の真ん中でじっとして動かないでいる「赤い色をしたハト」を偶然見つけたとのことです。元のカラー写真では、頭部の青味がかった灰色、体部の赤褐色が明瞭です。木下さんは「天売島ではウトウの帰巣シーンやケイフマリを観察できたので、それで大満足していたところ、さらにベニバトも」ということでした。

利尻島のベニバトは、日本野鳥の会道北支部長であり、 当会会員でもある小杉和樹さんによるものです。8日に 利尻富士町ポロフンベの海岸線を車で走行中に目撃し、翌 9日に写真撮影しました。羽の色合いなどから、天売島で 見られたものとは別個体とみられます。



ベニバト 2012. 7.30 天売島



ベニバト 2012. 9. 9 利尻島

北海道におけるベニバトの過去の記録は、直前の天売島のものを除けば、1987年11月11日に利尻島での1例のみと思われますが、実はこれは小杉さん自身の目撃によるものです(小杉和樹、利尻島の鳥、利尻博物館年報8、1988)。その時は写真撮影することができなかったのですが、それから25年、今回は再会のみならず、撮影することもできました。島在住の小杉さんならではのことです。

なお、天売島の両種の確認については同島の自然写真家・ 寺沢孝毅さんに依るところが大きかったとのことを、森久 さん、木下さんご両名から伺っております。

鳥見の初めは、宮島沼

札幌市東区 原 美保

「宮島沼にマガンを見に行きませんか」と、井上公雄さんから誘っていただいたのは、2001年の4月でした。鳥には興味がなかったけど、ニュースに取り上げられている場所なので、友達を誘って連れて行っていただきました。北村の啄木の碑や沼を見てから着いた宮島沼は、思ったより小さな沼でした。お昼頃なので、マガンの数は少なかったけど、今と違って餌をやっていい時代だったので、岬の回りは、オナガガモが餌をねだるように沢山泳いでいたし、ヒドリガモもキンクロハジロも割合近くで泳いでいました。そばの岸には、マガンがのんびりしていたので、お腹の模様もはっきり見えました。春は、本州の越冬地で、餌を貰っていたので人に慣れているけど、秋はちょっと距離がある、と教えて頂きました。でも今は、遠くにいて、近くに寄ってこなくなりました。

今、観察小屋があるあたりでお昼を食べていると、数羽のマガンが頭の上を飛んでいき、その羽音がバサバサと大きく力強く、心に残りました。ずいぶん前に、「レンギョウ」という題で、俳句を作らなくてはいけなく、「行く鳥の、羽音集めて、連翹咲く」。連翹の漢字の中に、羽という字が入っているのでくっつけた、ダジャレのような句を作った事を思い出しました。イメージとしては、ハクチョウでしたが。

「たまづさ」という名のついたお茶碗を見た事があります。 「たまづさ(玉章)」は手紙、便りの意味です。言葉は忘れてしまいましたが、渡ってきた雁が、故郷の便りを持ってきてはいないか、という意味の和歌が、箱の裏に書いてありました。「雁の玉章」という言葉があり、匈奴の虜囚となった蘇武が雁の脚に手紙を付けて漢帝に便りした故事からきているそうです。茶碗の形は覚えていませんが、銘だけ覚えていました。

一般に雁と言われているのは、マガンやヒシクイと知りました。雁の絵を見ると、お腹の縞模様や嘴を確認します。 どれか分からない雁の絵もあり、伊藤若冲の絵はちゃんと マガンと分かりましたが、広重の浮世絵の「月に雁」は分かりません。

「雁が音」は雁が鳴く声と聞いていましたが、カリガネという鳥がいました。「かりがね」というお茶もあります。茎茶です。風情のある言葉からとったのかと思っていたら、雁が海上で休むために小枝を咥えてくるそうで、それからとったそうですが…??? 雁の大きさを知ったいまでは、そんな小枝で雁が休めるのか、あの足で枝につかまれるか、だいいち雁は海に浮かぶ事ができるよ、と突っ込みをいれたくなります。

「雁」は絵の中の、言葉の中の鳥でしたが、身近な鳥になりました。

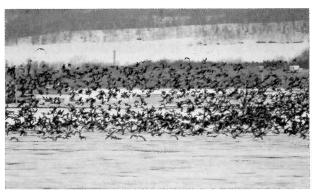
宮島沼の塒入り、塒立ちは素晴らしいと聞きましたが、 車の無い私には見る事が出来ないとあきらめていました。 何年かして宮島沼の探鳥会に行った時に、車に乗せてくれ た山本さんにお願いして、夕方まで時間をつぶし、塒入り を見る事が出来ました。



夕日と雁 (品川睦生さん撮影)

薄暗くなって、遠くに黒いツブツブが見えたと思ったら、それがマガンでした。段々大きくなって何十羽と連なってきていて、サオになれ、カギになれどころではなく、女王様の首飾りのような、レースのような模様でした。いつまでも、いつまでも見ていたい風景でした。ただマガンが帰ってくるだけに、どうしてこんなに感動するのでしょう。カラスの塒入りとは、大違いです。

次は、塒立ちを見たいと思っていたのですが、やっと2年前の春に、宮島沼センター主催の「たっぷり雁観会(塒入り塒立ちを見る会)」に、品川さんが誘って下さいました。あこがれの「塒立ち」です。まだ暗いうちから、マガンは起きて鳴き交わしていて、少し明るくなってきた頃から動き出し、沼全体に散らばっていたマガン達が集まりだしました。さあ、いっせいに塒立ちと思ったら、ばらばら



塒立ち (品川睦生さん撮影)

と何回かに分けて飛んで行き、ちょっとがっかり。

もう一度見なくてはと行った秋も、いっせいの塒立ちではなかったけど、飛び立つ瞬間を待つ時間は長く、飛んで行くと、もう行ってしまった…とあっけないので、何回かに分けての飛び出しのほうが、楽しみは多いかも。朝焼けの中を飛ぶマガンは、美しかったです。また見たくて、続けて参加しています。

今年の春は、沼の氷が解けず、マガンは少なかったですが、一部水面が出ているところに集まっていて、珍しい景

色を見る事が出来ました。秋は、なかなか帰って来ないマガンが、一度に帰ってきたので、沼の上はラッシュアワーでした。よくぶつからないものです。

秋は、宮島沼を後にしたマガンは、休憩地に寄りながら 東北の湖沼で越冬し、春は、北の繁殖地に帰るマガンに とって、宮島沼が日本最後の休憩地です。塒立ちの後その まま休憩地や繁殖地に向かうこともあると聞きました。ど ちらにしても、どうぞ無事に着き、また家族で戻ってきて と、祈って見送っています。

建設コンサルタントにおける環境調査と野鳥愛護

(株)ドーコン 河川環境部 小 本 智 幸

筆者は建設コンサルタントに所属する河川技術者として、環境調査やその結果に基づいた環境の分析、環境保全策に関わる検討に従事しています。建設コンサルタントという言葉に馴染みが無い方もいらっしゃるかもしれません。建設コンサルタントとは、社会資本整備における調査・計画・設計等の業務を中心としており、事業者を支援する技術者集団です。近年は、社会的合意形成や事業執行のマネジメントを支援する役割を担うことも多くなってきています。

本稿では、建設コンサルタントにおける環境調査とはどのように行われているか、その中でどのように鳥類の保全を検討しているかについて、河川環境の場合を例にとって、ご紹介したいと思います。

1. 建設コンサルタントにおける環境調査

当社の行なっている環境調査業務は、国や道、自治体など行政機関からの発注がほとんどで、大規模な民間開発事業などを受注することもあります。

調査の実施にあたっては、発注者の求める調査目的にあわせて調査手法を検討し、それを調査計画書としてまとめた上で、発注者と確認を行います。この計画書に了承が得られた段階で、計画書にそって調査を実施するわけです。調査にはお金がかかりますから、基本的に必要最小限で調査を行うことが必要となります。このため、現地調査で興味深い発見があったとしても、それが、業務の目的と異なるものであれば、基本的には調査対象外となってしまうこともあり、そのあたりが業務として調査を行う場合の限界になることもあります。

調査の種別は以下に示すように、大きく分けて4種類あります。

- ・河川水辺の国勢調査に代表される環境情報の蓄積に関 わる調査⇒実態把握
- ・事業実施に対する影響評価のための環境アセスメント ⇒事業実施の可否を判断

- ・事業手法を検討するための基礎データとしての事前調 査⇒事業実施上の課題の整理
- ・事業実施後の効果検証を行うための事後モニタリング ⇒ 事業実施の有効性

これらの種別毎に必要な調査を検討、提案して、調査を 実施するわけです。

2. 調査結果の取りまとめ

調査結果は、調査箇所・調査方法・調査日を明記した上で確認種を整理し、データ化します。データ化の仕様は、河川水辺の国勢調査マニュアルに基づくことが多く、種名や学名も、このマニュアルに記載されている基準に沿って取りまとめます。こうすることで、様々な調査結果を比較できるようになるわけです。データ化の際にはレッドデータブックの記載の有無など希少種情報についても取りまとめます。調査結果の考察については、調査の種別毎に異なりますが、生息環境情報と確認種の関係や保全の必要な種の抽出、そのための措置を取りまとめることが一般的です。

業務で実施する場合の調査は、鳥類ばかりではなく、その他の様々な生物種が調査対象となる事が多く、当社では生物種ごとの専門家が協力・分担する形で調査を進めています。例えば鳥類はA氏、植生はB氏、場所の特性はC氏、分析はD氏といった形です。調査結果は業務全体を統括する管理技術者が報告書として取りまとめ、発注者に納品することとなります。

業務の遂行の際に知り得た情報については技術者倫理に 基づいた守秘義務があり、これを開示、公開することはありません。ただし、納品された報告書は、公共事業の場合、 基本的に誰でも閲覧することが可能ですし、近年はインターネットで公開されているものもあります。環境調査の 場合、希少種情報が含まれており、心ない人々による乱獲や環境負荷を避けるため、情報の取扱については慎重な対応が必要となっています。当社では報告書をデータ化し、 セキュリティを施した社内ネットワーク・サーバ上に格納して管理しています。格納されたデータは、当社で独自に開発したIMS(Information Management System)と呼ばれる業務管理システム上で運用されており、業務概要や担当者などを検索できる形になっています。

3. 環境調査と野鳥愛護

業務として実施される環境調査は、基本的に公共事業の 実施の際に行われることが多く、このため以下の検討手順 で業務を進めることが一般的です。

- ・事業実施による影響の有無や度合いの検討
- ・貴重種情報に基づく保全箇所の抽出(守る)
- ・環境改変に対する代替措置の検討(維持する)
- ・事業実施による環境向上策の検討(改善する)

こうした検討を通して、良い環境はできる限り保全することを基本としており、可能であれば生物の生息環境として問題のある箇所を改善するといったことも検討しています。手を入れなければならないのであれば、せっかくだから今よりもよく出来ないかと考える、こうした考え方が、現在の建設コンサルタントに求められている役割だと考えています。

現在の河川環境は、必ずしも良好なものとはなっていないものもあり、特に野鳥の生息場所については非常に限られたものとなっていると考えられます。今ある自然を保全することが重要であることは間違いありませんが、生息環境を増やしていくためには、生物に関する知見に加えて、生息場所の特性(河川の場合は、冠水頻度や流水による撹乱作用、土質条件など)に関する知見も必要であり、これを統合して、具体化する手法を検討することが建設コンサ

ルタントの技術領域となります。

4. 地域連携

今後の公共事業においては、地域連携がますます重要に なってくると言われています。業務の実施においても、地 域連携をどのように進めていくべきかを検討するケースが 多くなっており、地域連携手法(組織体制・情報共有手 法など)を行政に提案し、行政を支援する形で実際の地 域連携活動に参画することも多くなってきています。公共 事業における地域連携には、様々な人々が参画することと なるため、活動の母体としての組織化を行う事例が増えて おり、組織化の形態は、協議会、検討会、勉強会、ワー クショップ等様々で、組織に参画する人材も、事業の内容 や種別によって様々です。組織においてなされた議論は、 インターネット等で配信するのが最近は一般的となってお り、その取りまとめ作業を建設コンサルタントが業務とし て担当することも増えてきましたが、基本的には参画した 人々や事業主体への支援が建設コンサルタントの立場です。 主役ではなく脇役に徹するのが建設コンサルタントです。

地域連携を実現するためには、河川管理者や学識経験者、調査機関、調査会社、地域団体などが連携し、データや知見を共有し、協働していくことが必要だと考えています。こうした取り組みは一部で行われてはいるものの、持続的に取り組むことはなかなか難しいものがあるのかもしれません。しかし、地球温暖化やそれに伴う生物の生息環境の影響が顕在化するといった新たな課題が生じつつある現代社会において、ある意味では理想かもしれない地域連携の実現を願ってやみません。

ミゾゴイを見ました(室蘭測量山) 室蘭市 森田 孝子

5月25日の午後3時半頃、いつものようにカメラを持って犬の散歩に出かけました。標高200mほどの測量山唐松平(室蘭市清水町)に向かって海沿いの断崖に続く林道を上っていきました。山野草や小鳥を見ながらのんびりと進みながらカーブを曲がったとき、私は思わず立ち止まってしまいました。私の10mほど先の地面に今まで見たこともない茶色の鳥・・・・。とりあえずなんという鳥か後で調べようと、急いで写真を撮りました。(後で見てみると、ピントが合っていませんでした。)

警戒しているのか首を伸ばしてこちらを見ているので、 私も動かず見ていたのですが、その後飛んで行ってしまいました。西日のさしこむ林の中を私が登ってきた下 方へと悠々と飛んで行きました。上からその姿を見降 ろす形になり、新緑と赤褐色のコントラストがとても 綺麗で、ただただ見とれていました。その場ですぐそ の写真も撮っておけばよかったと後悔しましたが、後 日ミゾゴイと分かり、さらに残念な思いをしました。 少しドキドキ。そして貴重でとても幸運な出来事でした。



ミゾゴイ 2012. 5.25 室蘭測量山

「探鳥会ほうこく」に先立って:この号から【記録された鳥】の配列順序が変わっています。いつもは最後を飾っていた?カラス類が真ん中あたりに出てきたりしています。今年9月に日本鳥学会(目録編集委員会)により発行された「日本鳥類目録改訂第7版」に準ずることにしたためです。今回の改訂では、日本の鳥として新しい種がかなり採用されていますが、それよりも大きな特徴は、鳥類の分類と配列が一新されたことにあります。これらについては次の第171号で紹介する予定ですが、まずは今号から順序を変えることにしました。近いうちには探鳥会のチェックリストの更新等も行うことになっています。



石狩川河口

2012. 8.19 札幌市豊平区 渡会やよひ

愛護会に入会して7ヵ月、初めての石狩川河口です。期 待に胸をふくらませ、はまなすの丘ヴィジターセンターを 後にしました。浜辺へ降り、テントを張ってキャンプを楽 しむ人たちの間を抜け、いよいよ開始です。

風はありますが薄曇り、まずまずの日和でしょうか。灰 白色に光る海に目をやると、海鳥が何羽も飛んでいます。 「オオセグロカモメ!」と叫ぶと、「いや、ウミネコだね」 とベテランの方が言います。白い体と灰黒色の羽を見ると すぐオオセグロカモメだと思ってしまう無知蒙昧、あわて て手元のハンディ図鑑を開きます。ウミネコは黄色い嘴の 先に赤と黒の模様、オオセグロカモメは黄色い嘴の先端近 くに赤い斑点・・・、うーん、すぐ判別できるかしらと混乱 していると、足の色が違うと教えてくれます。ピンクの足 はオオセグロカモメ、ウミネコは黄色、あらためてレンズ を向け納得、薄茶色の羽は幼鳥、成鳥の嘴の赤の斑点は餌 をやるための目印など、いろいろ説明を受けながら確認し ます。すると、近くで歓声があがり、「アジサシ!」の声。 急いで双眼鏡をはずし、目を凝らします。少し小型の シャープなライン、海面すれすれに飛ぶ敏捷な動き、初 めて見るアジサシは颯爽としていて、なんともカッコいい 鳥なのでした。そのあと、強さの増す浜風の中を移動しな がら、渚近くのトウネン(後にミユビシギで決着、どちら も初めて聞く名前でした)、空高く飛ぶショウドウツバメ、 河口対岸のアオサギなどウォッチして出発地点に戻りまし た。途中、植物に詳しい方が、砂地の強風に耐えて生育す る海浜植物の説明をしてくれました。オニハマダイコン、 ハマハタザオ、ハマボウフウ、コウボウムギetc。中でも、 孤塁を守るように黄色く可憐に点在しているハマニガナが、

実は地下茎でしっかりつながっているという特性はとても 印象的でした。

2年ほど前、豊平公園でカラ類、特にヤマガラの色彩に魅せられたのが、わたくしの浅い探鳥経験の始まりですが、どこへ行っても鳥たちの美しさ、そのひたむきな生態、自然の奥深さに魅了されます。今回もまた、ウォッチできた鳥の数は13種と少なく、カモメ・シギ類の判別の難しさも実感しましたが、無心に枝を運ぶ幼鳥や、浜辺でいっせいに同じ方を向いてはるか遠くを眺めているようなウミネコの群れなど、どこか神秘的で美しい光景に出会え、楽しく充実した時間を過ごすことができました。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、イソシギ、ミユビシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、トビ、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、ノビタキ、カワラヒワ 以上13種

【参加者】青山和正、秋山洋子、五十嵐加代子、今村三枝子、岩崎孝博、大表順子、川東保憲・知子、川村政博・幸子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、坂井伍一、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、新城 久、高正みちえ、高田征男、高橋きよ子、高橋良直、立田節子、田辺 至、種田昭夫、辻 雅司・方子、戸津高保、中正憲佶・弘子、野田貴代子、蓮井 肇、畑 正輔、原田幸恵、樋口孝城・陽子、本間康裕、松原寛直・敏子、丸島道子、村田睦子、村山純子、横山加奈子、吉田慶子、渡会やよひ以上47名

【担当幹事】坂井伍一、中正憲佶

鵡 川 河 口 2012. 8.26 札幌市北区 島田 陽子

今回の鵡川は、久し振りに予想以上のシギ・チドリに出 会えてちょっと興奮した探鳥会でした。

鵡川は、私にとって初めてシギ・チドリと出会った場所です。ここ数年、鵡川は台風等の影響で河口の地形や周りの環境が大きく変わりました。以前あった橋は流され、代替の立派な橋が出来ています。その橋の下流に例年はいたカモ類が今回は見ることが出来ませんでした。黄色い小さな花をつけた外来種セイタカアワダチソウが緑の草に映えてとても綺麗に見えたのは残念です。来年はもっと広がっているでしょうか。

しきりと鳴くのは姿の見えないコヨシキリ。気を取り直して歩くとニュウナイスズメの20~30羽の群れがふわーっと目立つ木の中に入りました。ほぼ終点の人工干潟に近づいた頃、アオアシシギの鳴き声が聞こえて来ました。その後からは、期待以上のシギ・チドリが続出し、久し振りの充実した時間に興奮し、そして満足感で一杯になりました。そう思えたのは私だけではなかったと思いま

す。予想外に鳥が出現したので、海の方をあまり見ないうちに鳥合せになりました。「お弁当をここで食べたかった〜」と久し振りに思いました。帰りは足取りも軽く朝の集合場所へ戻りました。

「ひょっとしたら・・・」とそんな期待を秘かに持ちつつ、また鵡川探鳥会に参加したいと思います。鵡川は草原あり海あり干潟ありと沢山の鳥に出会うことが出来るので、とても面白い所です。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ダイゼン、メダイチドリ、タシギ、オグロシギ、アオアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、オバシギ、トウネン、ヒバリシギ、キリアイ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ショウドウツバメ、コヨシキリ、ムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、カワラヒワ、オオジュリン

【参加者】加藤 瞳、門村徳男、川東保憲・知子、小堀煌 冶、小松正幸、坂井伍一、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・ 陽子、新谷幸嗣、鈴木 要、髙正みちえ、高橋良直、辻 雅司・方子、戸津髙保・以知子、中正憲佶・弘子、畑 正 輔、樋口孝城、本間康裕、前田一哉、松原寛直・敏子、丸 島道子、村田睦子、鷲田善幸 以上30名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

野幌森林公園

2012. 9. 2

【記録された鳥】カイツブリ、キジバト、トビ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ 以上18種

【参加者】青山和正、伊藤信治、今村三枝子、太田敏枝、大表順子、川村宣子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、小松正幸、坂井伍一、佐藤美栄子、品川睦生、柴田道彦・久美子、清水朋子、鈴木陽子、高橋きよ子、竹田芳範、戸津高保、中村 隆、成澤里美、野田貴代子、畑 正輔、松原寛直、横山加奈子、吉田慶子 以上27名

【担当幹事】品川睦生、成澤里美

石 狩 川 河 口

2012. 9.16

【記録された鳥】マガモ、コガモ、ウミウ、アオサギ、 チュウシャクシギ、イソシギ、ミユビシギ、トウネン、ユ リカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、 ハシボソガラス、ハシブトガラス、ノビタキ、ハクセキレ イ、カワラヒワ

以上18種

【参加者】愛澤桃美、青山和正、井上詳子、後藤義民、坂井伍一、島田芳郎・陽子、辻 雅司、中正憲佶・弘子、畑 正輔、樋口孝城・陽子、本間康裕、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田慶子、渡会やよひ 以上19名

【担当幹事】島田芳郎、横山加奈子

宮 島 沼 2012. 10. 7 札幌市北区 辻 方子

例年にない猛暑の余韻を残しながらも宮島沼を渡る風は 秋を伝えています。空気も透明で観察にはベスト。とはい え鳥たちは遥か彼方。自然(野生)と程よい距離を保って 観察するのがマナーと思っていますがもう少しお近付きに なりたいなと思いつつスタートです。

そんな中カルガモは近くで数多く姿を見せてくれました。 その彼方にマガン、少しのヒシクイ、カモ類、サギ類とま とまっている感じです。マガンの数は前日で12,000羽と のこと。すでにマガンのピークは過ぎ、ただでさえ寂しく なった沼なのに大半のマガンは朝食に出掛けてお留守です。 でもこういう時こそ数少ない一羽一羽をじっくり観察でき る良い機会と前向きに考えると嬉しい出会いもあるもので す。今回はシジュウカラガンがそれ!久々です。

彼等にはある思い出があるのです。超初心者の頃、長都沼でのこと。バーダーの方が「あっちにシジュウカラいるよ」と親切に教えてくれたのですが私のイメージしたのは身近にいるかわいい小鳥。「それならまっいいか」と探すこともせず、お目にかかるせっかくのチャンスを逃してしまいました。シジュウカラに顔が似たガンがいるなんて思いもよらず、後で勉強不足を猛反省した出来事でした。

さて沼ではベテランの方が木に止まったチュウヒをスコープで見事キャッチ。美しいV字飛行こそ見逃しましたが木立の中でくつろぐチュウヒはあまり見たことのない光景で楽しみました。小鳥たちも秋風にせき立てられるように飛び交い、オオジュリン、アオジ、ヒバリなどの夏鳥のほかに、これは探鳥会が始まる前のことですが、アカハラやツグミを見た方もいて、宮島沼は季節の変わり目を体感させてくれる舞台の感がありました。

探鳥会も終わるという頃、食事を終えたマガンがかなりの数、編隊を組んで帰ってきてくれて「ミニねぐら入り」を見るよう。鳥を愛する私たちへのサービスかな。

マガンもかつて日本では狩猟対象であり数がぐんと減った時もあったと聞きます。彼等の渡る姿を見るたびに無事に目的地にたどり着きますようにと願わずにはいられません。

今回お世話くださった幹事さん、ありがとうございます。 お話を興味深く聞かせていただきました。 【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、スズガモ、ミコアイサ、カイツブリ、ハジロカイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、バン、トビ、オジロワシ、チュウヒ、アカゲラ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ムクドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、アオジ、オオジュリン 以上29種

【参加者】青山和正、秋山洋子、岩崎孝博、臼田 正、内山純一・雅子、江坂嘉昭、北川博一、北山政人、坂井伍一、佐藤ひろみ、品川睦生、柴田道彦・久美子、島田芳郎・陽子、高正みちえ、高橋良直、辻 雅司・方子、道場 優、戸津高保・以知子、中正憲佶・弘子、野田貴代子、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、本間康裕、松原寛直・敏子、渡会やよひ 以上33名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

野幌森林公園

2012. 10. 14 札幌市南区 原田 幸恵

私は普段、草花や樹木の観察に興味を持っており、鳥に 関しては初心者です。今回、会員の方に誘われて探鳥会に 参加する機会を得ました。悪天候続きで空模様が心配でし たが、当日は秋晴れとなり、うれしい誤算でした。

普段は植物観察のときに双眼鏡を使うこともありますが、まだ不慣れなので、対象を視野の中に捉えるのはとても難しく、まして野鳥のように遠くで動くものを捉えるのは至難の業です。またいつもの習慣で、足元の草花に目を奪われがちなので、気がつくと皆さんから遅れてしまったということもしばしばでした。

オオアカゲラがいるよと言われ、慌ててその方向に双眼 鏡を向けたのですが、空振りでした。特に印象に残ったの はキクイタダキです。この鳥の名は初めて耳にしました。 日本で最小の鳥らしく、頭に黄色の「菊を戴いた」ような 珍しい姿だということですが、残念ながら私は確認できま せんでした。なんとか自分で観察できたのはオシドリくら いでしょうか。沢山いたようですが、あいにく、水辺に生 い茂っている葦に視界を遮られ、二羽だけ確認できました。

このように、私の野鳥観察は拙いものでしたが、多くのことを学びました。鳥の名前や鳴き声の区別についても面白い覚え方を話してくれたので、とても参考になりました。またみなさんが自然の色に溶け込んだような服装をしてきているということもわかりました。

今回のバードウォッチングで、野鳥を見ることの楽しさと難しさを体験しました。これからも数多くの観察会に参加して、鳥たちと仲良くなりたいと思っています。 そして今まで植物を通して触れてきた自然への理解を少しばかり広げていきたいと思います。鳥の名前を沢山憶えて、以

前は花や樹によって感じていた季節感を、野鳥を通しても 感じられるようになれば素敵だと思います。

【記録された鳥】カイツブリ、オシドリ、マガモ、コガモ、キジバト、トビ、ハイタカ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、アオジ



キクイタダキ

【参加者】青山和正、秋山洋子、石井健太、伊藤信治、今村三枝子、内山英晋、大表順子、鬼丸順子、川東保憲・知子、後藤義民、小西芙美枝、小山博寿、坂井伍一、佐々木裕、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、辻 雅司・方子、戸津高保、富川 徹、成澤里美、畑 正輔、浜野チェ子、原田幸恵、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、山川美香、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、渡辺好子 以上38名

【担当幹事】後藤義民、富川 徹

野幌森林公園

2012. 11. 4

【記録された鳥】ハクチョウsp、コガモ、トビ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、キレンジャク、ゴジュウカラ、ウソ、アオジ

以上15種

【参加者】秋山洋子、片山紀久枝、後藤義民、小西芙美枝、坂井伍一、品川睦生、白澤昌彦、高橋きよ子、立田節子、道場 優、中正憲佶・弘子、南條沙也香、西尾京子、野田貴代子、畑 正輔、樋口孝城、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子 以上22名

【担当幹事】道場 優、松原寛直



【小樽港】2013年1月13日(日)

札幌から貸し切りバスを利用して 行います。日和山灯台付近、祝津漁 港、高島漁港、フェリーターミナル などを周り、海ガモ類、カモメ類、 ウミガラス類などを観察します。以

下の要領で実施しますので、参加希望者は申込みください。

集合場所:札幌駅北口(中央) 「鐘の広場」

集合時刻:午前8時帰着時刻:午後4時頃

定 員:45名 参加費:1,500円 申込先:畑 幹事

1月6日(日)から9日(水)の毎日午前9時から午後8時まで、電話・E-mailにて受け付けます。

E-mailの場合、電話番号を明記願います。 なお定員になり次第締め切ります。

電話 011-894-0017

E-mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食をとります。
- ・往復とも途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2013年2月3日(日)

冬の野幌森林公園を雪を踏みしめながら、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。12時頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。 昼食はふれあい交流館でとることができます。

集 合:野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通: 夕鉄バス 新札幌駅前発(文京通西行) 大沢公園入口下車 徒歩5分 JRバス 新札幌駅前発(文京台循環線) 文京台南町下車 徒歩5分

【円山公園】2013年3月10日(日)

春の訪れを迎えた円山公園内をキツツキ類、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。

午前中で解散の予定です。(昼食不要)

集 合:円山公園管理事務所前 午前9時

交 通:地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩10分

【ウトナイ湖】2013年3月17日(日)

南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期北の繁殖地に 渡り始めます。渡り鳥の中継地であるウトナイ湖で多くの カモ類、オジロワシ、オオワシなどを観察します。湖岸を ネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で 鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとる ことができます。

集 合:野生鳥獣保護センター前 午前9時30分 交 通:道南バス 新千歳空港発(苫小牧行) ウトナイ湖下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。
☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時~午後4時(土日、祝祭日を除く)

鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

- ·日 時 2013年1月12日(土) 13:30~16:00
- ・場 所 かでる2・7 520研修室札幌市中央区北2条西7丁目

前年とは会場が変わっています。ご注意ください。

- ・講 師 玉田克巳氏 (北海道立総合研究機構 環境科学研究センター)
- ・演 題 沈黙の春 再来?
- ・講演内容:「沈黙の春(Silent Spring)」とは、1962年に出版されたレイチェル・カーソンの名著のことで、農薬などの化学物質によって、鳥達が鳴かなくなったことを訴えた作品です。農薬が原因ではありませんが、最近、世界各地で夏鳥が消えつつあります。1999年、Krebsらによって夏鳥の減少を訴える論文が、英科学雑誌ネイチャーに掲載されました。その表題が「The second Silent Spring?」です。今回の講演では、北海道の草原や湿原で著しく減少しているシマアオジを中心に、夏鳥などの減少を紹介し、市民レベルでできる鳥のモニタリングの重要性を紹介します。
- ・野鳥写真映写(15:10頃から)皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。問い合わせは高橋幹事まで(BRB32264@nifty.com)。
- ・参加費 500円
- ・懇親会 新年講演会終了後、煉瓦亭(北1西3、敷島 北一条ビル地下一階)で行います。会費は3,500円程度 です。前もっての申し込みは不要です。どうぞご参加 下さい。

【新しく会員になられた方々】

北嶋 京子 (札幌市豊平区)、高正みちえ (札幌市中央区) 水上 勝夫 (天塩郡幌延町)、山川 美香 (札幌市中央区) 蘇 永(すうびいん)(北広島市)

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度 4 月より) 郵便振替 02710-5-18287 〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西11丁目加森ビル 5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465 HPのアドレス http://homepage2.nifty.com/aigokai/